

## E-8 家庭の機能からみた住居パターンのあり方 (I)

### —子どものすまい方と親子関係—

愛知教育大 渡辺みよ子

1. 住居が家族員の精神的安定、生活力の再生産などの機能をもつ家庭生活の器である限り、風紀上の問題や生理的あるいは衛生的要因のほかにも家庭の機能が十分に発揮できるか否かという要因をも考慮した上でその標準あるいはパターンが決定されねばならない。今回は家庭の機能の中でもとくに子どもの人間形成に着目し、子どもの年齢に応じたすまい方を追究する一助としたい。

2. 中学生、高校生を対象として1)自室所有状況と家庭生活条件、2)住まい方と親に対する意識、を主な調査項目とする調査用紙を作成し、質問紙法による調査を実施した。

3. 1) 自室所有状況を年齢別にみると中学2年生までは完全専用組、完全共用組ともに30%で差がみられないが、中学3年以上の学年になると、次第に完全専用組の割合が多くなり、高校3年生では約64%を示す。

2) 子どもと親との心理的接近度を子どもの自室所有状況別にみると、親に対して「～したい」という能動的欲求は一般に高学年になるにつれて低下するのに比し、完全専用組では中学3年生より高校3年生まで横バイ状態である。また、子どもの親に対する好意度においては父親に対してはなんともいえないが、母親に対しては、半専用組（勉強のみ専用空間使用）が高校2年生まで他に比べて高い好意度を示す。